

現代名作集

(下)

# 現代名作集

(下)

新潮社版



日本文学全集 50

## 現代名作集(下)

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)(大代)1111 振替東京 808 郵便番号 162

印刷所／塚田印刷株式会社 製本所／大口製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1967

目次

|                |   |
|----------------|---|
| 肉体の門（田村泰次郎）    | 七 |
| 夏の花（原民喜）       | 壹 |
| デンドロカカリヤ（安部公房） | 五 |
| 鶴（長谷川四郎）       | 七 |
| 愛玩（安岡章太郎）      | 九 |
| 小銃（小島信夫）       | 三 |

太陽の季節（石原慎太郎）

二三

地 唄（有吉佐和子）

一五

岩尾根にて（北 杜夫）

一五

楯山節考（深沢七郎）

二〇九

夜の波音（阿川弘之）

二五二

パニック（開 高 健）

二七三

天使の生活（中村真一郎）

二七

飼 育（大江健三郎）

三七

裝飾評伝（松本清張）

三八二

娼婦の部屋（吉行淳之介）

四〇一

坑木置場（井上光晴）

四一九

海の見える芝生で（曾野綾子）

四四七

飛ぶ男（福永武彦）

四六九

家の中（島尾敏雄）

四八九

静物（庄野潤三）

五〇九

四十歳の男（遠藤周作）

五五三

傷だらけのパイプ（三浦朱門）

五三

注 年 解  
解 譜 説

山  
本  
健  
吉

五七  
六二  
三九

現代名作集  
(下)



# 肉体の門

田村泰次郎

小政のせんと自分で名のる浅田せんは、裸になると、まだ乳房も十分にもりあがつてはいない。十九歳にしては皮膚に艶がなく、筋肉に脂肪の乗りがうすかった。身体の青白さは、すこし病的のようだった。

せんは一日置きに朝のあいだ、矢の倉の刺青師彫留のもとへかよっている。まだ四十に間はあるが彫留は、戦前からやくざのあいだではかなり知られた彫師で、戦時中旋盤をあつかわされていた微用帰りの腕にも変りなく、針の目の奇麗さと、仕あげの派手さで、いま、売りだしかった。浅草のある親分のおもい者で、もと柳橋\*に出ていた女の背に彫った、彫留の牡丹は蝶が来てとまるといわれ、水もしたたるとまで噂のある、終戦後彫物界第一等の傑作といわれている。

「親方の牡丹は、屋根熊さん以上だと、年寄り連中は

いってまずぜ」客が愛想を言うのと、「なあにあつしのはいたずらでさあ」と、口ではへりくだったが、屋根熊の絢爛さは勿論、彫友、彫金、宇之などといったかつての名手たちの手法まで、ひそかにとり入れていることは、まちがいないかった。そんなように芸の上ではひたむきなところがあつたが、いわゆる名人肌といった気むずかしさがなく、客当りはごく気さくなために、家には客がたてこんでいる。横浜や水戸からかよってくるのもあつた。

焼跡に建った六畳に四畳半のバラックである。四畳半を仕事場に、六畳は客の控えの部屋にあてていたが六畳間は朝から晩まで客でいっぱいなので、彫留のみさんは、赤ん坊を抱きながら、お茶の接待に追われきりである。客は博奕打ちやテキ屋ばかりでなく、復員の闇屋からチンピラまでいた。せんのようなし、うばい娘もいた。一体に、玄人と素人との区別が、今の世間でもあいまいなように、ここでもそうだった。主人が客に小言を言わないのをいいことに、闇屋やチンピラたちは、勝手なことをしゃべり散らしている。ガソリンをいくらで買って、いくらで売りとばしたと

か、いかさまズルチンでいくら儲けたとか、そう思うと、チンピラたちは「かつ（恐喝）でまきあげるにやまんじゅう（時計）が、てっとり早えが、足がつくのも早えからな」なんていつて威張っている。博奕打ちやテキ屋はどっちかというと無口だった。今の世間の例にもれず、ここでも素人が玄人を庄倒していた。彫るのは、一日一寸角の大きさときまつていたが、客が多いので下働きが二名いる。どの客もよく金を都合して、根気よくかよっている。きちんときまつてかよっていたのが、急に顔を見せなくなるのがあった。検挙されるか、身体があぶなくなつてずらかるかするのにちがいない。

「関東小政」と一字二寸角の勘亭流で、せんは左の上膊に彫つてもらっていた。一字三百円で、すでに三十日あまりかよい、まだ「政」の字だけが筋彫りのまま残っている。彫りあげると、千二百円をつぎこんだことになるのだった。街のいよばい娘であるせんにとつて、千二百円は安い金額ではない。ただせんはなにがなんでも、自分の肌に刺青がして見たいのだ。身体を売つても、まるつきり肉体のよろこびをまだ感じな

い彼女は、すこし早くひらき過ぎた花が匂いのうすいように、身体も、精神もどっかまでもないかもしれない。せんは人間の皮膚に、さまざまの絵や字が刻まれることが珍らしいのだ。そういえば、彫留へ来る男たちは、みんなそうなのにちがいない。丁度、原始人が、自分の身体を刺青で飾るように、それが智能の低い子供のような単純なよろこびだった。それとともにまた、原始人が虎や、鱈や、熊と闘うには、人間以上の能力をそなえたなにかに化けなければならぬのと同じように、せんの日その日が闘いである生き方には、自分よりもっと強い、逞ましい神秘的な力を本能的に欲しがった。自分たちの縄張りを荒らす、山の手あたりのお嬢さん面したパンパン娘を、路地にひきずりこんで、ぱつと左の腕をまくりあげ、「関東小政」の四字が月の光か、ネオンのあかりに映えるのを眼にしたときの、相手の毒気を抜かれた表情を想像すると、闘志で胸もとがうずくのだ。

「お前さん、お見それでないよ、あたしゃこういうものさ」と、凄味を利かせてやんわりと出るか、それとも、「見損うねえ、へん、あっちにもこっちにもある

お姐えさんと、お姐えさんがちがうんだよ」そう頭からかむせてやろうか——三つ束ねの墨を含んだ絹針が、ぶつ、ぶつと皮膚を噛む痛さを、齒を喰いしぼってたえながら、ひそかに口のなかでつぶやいていると、いつか痛さも忘れてたのしくなるのである。「ちえつ、強情なあ、まだなあ」襖をへだてて、しんとした気配に、チンピラどもは眼を見あわせて舌打ちをする。

小政のせんはまるで少年のような筋肉だけの肉体を持ってゐるが、その魂はまた、氣に入らぬものには、なんにでも噛みつくこうとする気魄にあふれている。せんにはどんな怖いものもない。いや、せんだけでなく、彼女の仲間、二十三歳の菊間町子をのぞけば、ボルネオ・マヤこと菅マヤでも、ふうてんお六こと安井花江でも、ジープのお美乃こと乾美乃でも、みんな人間の少女というよりも、獣めいている。それも山猫か、豹のような小柄で、すばしっこい猛獣である。そういう猛獣たちが獲物を狙って、夜のジャングルをさまよふのとかわらない、必死な生存欲に憑かれて、彼女たちは宵闇の街をうろつくのだ。背広のサラリイマンであろうと、復員服の闇屋であろうと、闊肥りの年

輩者の工場主であろうと、みんなこの猛獣たちの獲物である。

彼女たちのいふばいはいは、女衞や桂庵みたいな、あいだにはいって儲ける手合いがいない。街の都指定の鮮魚直売所には新聞紙に下手な字で、「生産場と消費者との直結」とうたつてあるが、彼女たちのしよばいのやり方こそ、それにあたる。自分で客を見つけ、自分売る。これ以上の合理的な直売法は、どんなやり手の商人でも考えだしたことはない。銀河や星のきらめいている夜空のもとで、あるいは蒸し暑い雨雲の垂れこめた下で、焼けビルのなか、立ちかけのマアケットのなかで、埋め残されたじめじめした防空壕のなかで、彼女たちは雑作もなく、仰向いてたおれる。そうして、野天の取引はおこなわれる。客の眼は、彼女たちの瞳が意外に奇麗に澄んでいるのを見て、とまどうときがある。まだ情欲の神秘を知らぬ彼女たちは、まったく生きがための必死なしよばいにだけ打ちこんでいるのだ。客はちよつとひるむ。彼女たちには、何故客がびくつくのかわからない。彼女たちは不安がり、客の眼がもとの好奇の光をとり戻すまで、じっと

客を抱いて放さない。それが彼女たちの闘い、——生きんがための闘いだ。

法律も、世間のひとのいう道德もない。そんなものは、日本がまだ敗けないとき、彼女たちが軍需工場のなかで汗と機械油にまみれているときを最後に、爆弾と一緒に——そして彼女たちの家や肉親と一緒に、どっかへふつとんでしまった。なんにもなくなつて、彼女たちは獣にかへつたのだ。まったく、彼女たちは廃都の獣である。彼女たちは地下の洞窟で眠り、喰らい、野天でまじわる。そのまだ青い巴旦杏はんとうようのような肉体は、なにもものをも恐れない。むごたらしく、強い闘いの意欲だけがあふれている。爆弾で粉碎され、焼きはらわれた都会は、夜になると、原始に還る。彼女たちの血に飢えた、凄惨な狩りがはじまる。狩りは旺盛な意欲をもつて、機敏におこなわれる。ある夜は、逆に彼女たちが狩られることがある。省線電車の駅で、高架線の下で、十字路で、彼女たちをつかまえようとする縄が幾重にも張りめぐらされる。だらしがなくて、ぼんくらな有閑娘たちが、それにひっかかつて、泣きべそをかいているあいだに、彼女たちはすばしっこく巢に

ひきあげて、笑いあうのだ。

けれども、彼女たちにも掟おきてがある。それは自由を確保するための掟である。原始人のタブウのような、あるいは獣の世界にある「群」の意識のような、自衛と、生存のための連帯の秩序である。たとえば、彼女たちの縄張りである有楽町から勝鬃橋かちどきばしまでの区域で、知らない娘が男をひっぱっているのを見つければ、協同でそういう外部の敵に襲いかかる。そういうときのためや、彼女たちがさつ（警察）にあげられたときに、亭主だとか兄貴だとかになつて貰いさげに来てくれる男の仲間がいた。けれども、そんな若者たちは、決して彼女たちのいろでもなんでもない。ただの生活協同者にすぎない。外部に対してはそういう掟のようなものがあるが、仲間同士のあいだでも、「群」の掟がある。たとえば、正当な代価をもらわずに、自分の肉体を相手にあたえる者が一人でもあれば、それは自分たちの協同生活体の破壊者である。何故ならそんな行為は自分たちのしょうばいおひを脅やかすことになるからだ。そんな者に対する制裁は、惨酷で、仮借なくおこなわれる。三カ月も彼女たちの仲間だった一人の娘

は、有楽町の高架線の下で宝籤たからくじを売っていた学生と恋に落ち、「群」の掟を破ったがため、兵隊のように頭を丸刈りにされて、仲間から追いだされた。

腐った泥の匂いのする掘割にのぞんだ焼けビルの地下室が、彼女たちの巢すだった。こんな地下の洞窟のような場所に、彼女たちが棲すんでいるとは、誰も、——そとで組んで仕事をする男たちも知らない。恐らく、ビルの持主さえ知らないにちがいない。浮浪児と、ルンペンとが、ときどき何かいい貰いものでもあるかと覗きに来た。彼女たちはそれを見ると、噛みつくようにになりたてて、追っばらった。ここは客をつれこんでくるところではない。ここは彼女たちだけの安息所だ。闘いに疲れた獣の眠り、食う場所だ。

洞窟の入口には断ち切れた水道管が、蛇のように鎌首をもたげていて、そこから朝も晩も水が噴きあげている。水はコンクリーの傾斜のうえを流れて、掘割にそそいでいる。この水で、米をとぎ、横文字のはいつたバターの二ポンド入り空罐を飯盒はんごうがわりに、飯を炊くと、素敵滅法界な銀しゃりが炊ける。

壁の崩れた個所のすぐ前を、糞尿船や、砂利船がと

おった。近くの岸に平べったい船がとまり、よくしなう板を船と岸とのあいだにかけ、焼跡からこわれた煉瓦や鉄屑をいっぱい積んでいることもある。朝まだ暗いうちに、しこたま荷を積んでいるらしく、この掘割へ吃水くつすい深く、ひっそりとはいって来る船がある。

「小父さん、ここはお閑所よ。たどとはいわないから、安くして、すこし置いてきなよ。なんだったら、身体ととつかえてもいいわ」

米の闇船をからかうのだ。木更津あたりから夜出てくる船である。

ビルの岸に、半分水びたしになった、ほとんどもう沈みかかっている小蒸気船があった。蒸し暑くて、寝苦しい夜は、しごとから帰った彼女たちは、水垢の匂う船室に寝そべり、ペンキの剥げた舷はなに腰かけて、「長崎物語」や、「婦系図ふけいず」を歌う。銀河が水面にうつって、さざ波にゆれるのを眺めて歌う彼女たちの頭には、いまし方すましてきた男たちとの抱擁なんか、遠い世界の出来事としか思えない。

「あたいの母さんは、弟と河の中で死んだのよ。代地だいち河岸がしでさ。弟って七つだもの、逃げられないわ」小政

のせんは、そんなとき生々しく自分の運命を思いだす。せんの家は本所横網町で、駄菓子売っていた。母親と弟は橋を渡って、柳橋まで逃げたのだった。

「あんたは、そんなとき、どうしていたの」と、ジーブの美乃が訊ねた。

「あたいは、大崎の工場にいたので助かったんだよ。

大川へ飛び込んだり、船に乗ったひとたち、みんな死んだわ。舷につかまっていた、死んでいたお角力さんもいたってよ。水の上に出ていいる手首だけが真黒に焦げたって。水が燃える、——呼吸が出来ないのよ」「もう、そんな話はよしなよ」とボルネオ・マヤが言った。「あたいたちは、みんな戦争でやられた仲間にきまつてるじゃないの」マヤはボルネオへ行つたことはない。マヤの兄がボルネオで戦死した。それ以来彼女はボルネオのことばかり話すので、こんな名前がついた。眼が大きく、小肥りで色が浅黒いことも、この名前をひきたてた。けれども、ふだんは誰も、あんまりお互いの過去を言いあわない。そんな感傷をわけあっている気持のゆとりがないのだ。まず食わねばならぬのである。そのためには、まず呪うことだと思つて

いる。なんでもかんでも、自分たち以外のものは、みんな呪うのだ。浮浪児も、ルンペンも、赤ん坊も、労働者も、人妻も、みんな呪うのだ。親も、もつと偉いひとと呪うのだ。ビルも、電車も、トラックも、みんな呪うのだ。誰も自分たちをかばってはくれないことをはつきりさせ、自分の気持にくぎりをつけるのだ。そこで、団結は一層強められる。その団結は誰が強いものでもなく、誰が教えるものでもないどうしても生きて行こうとする本能が、ひとりでにそうさせるのだ。

街にはお嬢さんくさいあいまい娘たちが、大勢いる。そんな娘たちの組もあるだろう。けれども、そんな娘たちの仲間は、ただ肉体の興味だけで、だらしくひきずられている、はつきりとした徒党というものはない。その日その日の吹く風につれて、舗道にこぼれあつまつては、また散ってゆく柳の葉っぱのように、顔をあわせて、一緒に遊んでは、つぎの日はまた知らぬ顔の、そんなものとはちがつている。マヤたちのはあきらかに一つの組である。一つの党である。戦火が、ひとりでに廃都の焼け跡に生んだ自然発生の党である。何党というのだろう。名前も、七面倒な綱領

もないが、飢えと孤独にさいなまれた娘たちだけの、土から生えた根強い団結と、闘争力とを持っている秘密の党である。

「魂消たね、浅草の芸者で、太腿に蜘蛛を彫ってるのがあるそうよ。白粉彫りでさ。酒を飲んだり、いきむと、白い蜘蛛が浮きあがるのだって、——魔除けになるんだってさ」彫留の家で聞いて来た噂を、せんが披露した。「いやらしいったら、ありゃしない」彼女たちは肌の手入れもしないし、幾日も風呂へ行かない。開市で買った一瓶八円のいんちき香水を、思い出したように胸にふりかける。白粉のまだらに剥げ残った顔に、また、パフをはたく、髪は酸っぱい汗の匂いがした。それらが体臭とまじって、彼女たちの身体からは動物園の獣の檻の前へ行くとする、あの獣特有の青くさい、小便くさい、生活的な匂いが発散する。彼女たちがいつも肌身から離さない身体にくらべて大きすぎる買いの袋や、手下げ籠のなかには、赤いセルロイドの石鹼箱がはいっているが、なかはべとべとに濡れて、乾くときがない。肉体の取引がすむと、彼女たちはごしごしと、部分だけを偏執狂のように熱心に洗った。

妊娠と、病気にかかるのを怖れる、これは自衛の本能からだった。

人妻のよく手入れした肌や、お体裁ぶったつましきを見ると、へどが出そうに憎悪した。なんともいえない不潔感で、胸がわるくなる。不倶戴天の仇敵のように、唾でも吐きかねない。菊間町子を、仲間にはいつてきたときから、彼女たちが毛嫌いするのは、そのためだった。町子だけが二十三歳の人妻である。硫黄島で良人を失った未亡人だというのだが、二月前から彼女たちの仲間にはいつていた。土橋のところまで客をひっぱっている現場を、小政のせんがみつくて、おどかすと、しまいには泣きだして境遇を訴えるので、つれてかえったのだ。ところがいまでは町子の人妻らしい女臭さが、彼女たちの憎しみの的になっていた。彼女たちには町子の襟の抜き加減から内輪の歩き方まで、癪にさわるのだ。

「お町さんたら、へんだよ、この頃、——ちつとも寄りつかないし、たまに帰ってくると、いやにそわそわと尻が落ちつかないじゃないか。男でも出来たんじゃないの」小政のせんが町子の挙動に敏感になつてい

る。「ねえ、マヤ、あんた、そう思わない？ たしかに普通じゃないよ、いんばいならいんばいでいいじゃないか。なにさ、あの澄ました顔つきは」彼女たちは世間がなんと見ようと、こわいものではなかったが、町子には世間の眼が気になった。中身はいんばいであろうと、よそ眼には素人の奥さんに見られたいのであった。うわべだけとりつくるおうとするそんな分別が、彼女たちにはなにかいまわしく、不純に思えるのだ。

蒸し暑い夜で、じっとしていても、額や、胸に汗の玉が湧いた。町子は例によつてまだ帰らなかった。マヤたちは、岸に涼んでいた。今日は、せんの刺青が仕あがつたので、彼女は心が浮き浮きしていた。濡れタオルを左腕にまいて、針痕の腫れをひやしていた。「あしたからは、小政の姐御<sup>あねご</sup>って、山の手のお嬢さんたちにお辞儀をさせてやるから」刺青をそつと右手でいたわるように押えろとせんは、全身に闘志がみなぎるのを感じた。突然足音がして、ひとのはいつてくる気配がした。一足一足が用心深い歩き方をしていた。「誰？」とせんが呼んだ。人影は彼女たちのうしろに立っているのであるが、返辞をしないのだ。「誰なの

さ、一体。警察のひとつじゃあない？」「お前たちはなんだ。ここはなにするとこだい」「ここは、あたいたちのおかん場よ。警察のひとつなの」すると、ふうん、とひとりでうなずき、その男は寄ってきて、彼女たちのあいだに割りこんだ。暗いなかで、よくはわからないが、まだ二十四、五の若者だった。すこし、びっこをひいているのを、せんが眼ざとくみつつけて、とがめた。「うん、いまお巡りに追われて、一発喰らったんだよ。擦過傷さ、たいしたことないよ。ちよつと、やすませてもらうぜ。お巡りがきたたら、うまくいってくれよ」「ここはこないよ、誰も」

男は安心したようにしばらくじっとして、彼女たちのなかに腰を降していた。「畜生、ちくちくしゃがる」と、傷の痛みにうめいた。「——誰か焼酎<sup>しょうちゅう</sup>買ってきてくれねえかなあ、表の屋台で。どんなのだって、かまわねえ」「あたいが買ってきたげる」マヤが立ちあがると、男はズボンのポケットから革の財布をとりだしてわたした、マヤはビール瓶を持って出て行った。マヤが出かけると、夜の夕立がきた。水面は夜目にも白いしぶきをあげた。せんたちは、男をさそつて、奥に